

立ちどまる



外山 滋比古

アリが歩いているのを見てみると、ときどき立ちどまっている。どうしてなのかわからないが、それがいかにも思慮ぶかげに見える。また、ハトが歩いているとき、立ちどまりは

しないが、首を周期的に後へ引く。まるで、しゃっくりでもおこしているみたいだ。これで目の位置が一時的に停止するから、立ちどまっているのと同じ効果があるのではあるまいか。そんなことを空想する。

歩き出したばかりの赤ん坊も、二、三步進むと立ちどまる。おそらくそこでバランスをとりもどして次の歩行への準備をするのであろう。まわりの大人は息をのんでその立ちどまりを見守るけれども、その意味を深く考えようとはしない。休んだりしないで、どんどん歩いてくれればいい、と願う。

われわれは大きくなると、もう赤ん坊のような歩き方はしなくなる。これは一見、進歩のように見えるけれども、そうとばかり言い切れないところもある。

碁、将棋など勝負の世界で焼きが入るということを言うらしい。どんどん頭角をあらわしてきた人が何かの拍子で負けがこむようになる。そうすると、何をしてみても勝てない。その苦しい時期をくぐり抜けてまた勝てるようになる、焼きが入ったのである。この強さは水をぐぐってきた鋼はつがねのように、もうちょっとくらいではびくともしない。本当に強い人はかならず焼きが入っているという。

順風に帆をあげて出世してきた役人などには人間としての魅力に乏しいことがすくなくない。そういう人が思いもかけない挫折に遭い、浪々の生活を送るといった不遇をかこった

あと、また、カムバックすると、見違えるほど人間の幅が大きくなっている。これも焼きが入ったのだ。

学生が、病気で休学したとか、入試に失敗して一年遊んだとかいうのも、人生の歩みからすると「立ちどまり」に当たるだろう。弱かった人が伝染病をしてなおつたら本人もびつくりするような頑健な体になったという例も多い。生れてから医者にかかったことがないと自慢していた人がかりそめの病気でポッキリ行ってしまうかと思うと、幼いときいつまで生きるかと言われた人が案外、天寿をまっとうする。ときどき病気をして立ちどまるのがいいらしい。

秀才ほどスランプをおそれる。鈍才にとつては日々これスランプだから、少しくらいの頓挫は平気である。明日という日があるさ、くらいに思っているから、スランプの方が恐縮して退散する。秀才がスランプ恐怖症にかかるのは学校が立ちどまることを教えず、馬車馬のようにひたすら走るのがよいと思っっているからである。それが自然の大理にさからうことすら考えようとしなさい。

考えなくても、実際にはちゃんとうまく行っているから、人間、よくしたものである。

人間は、老若男女を問わず、毎日、大きく立ちどまっ

るのである。どんなブルドーザーのような人でも、かならず立ちどまる。毎夜の睡眠である。その睡眠がいかに大切であるかは、ものを食べなくてもかなり長く生きられるのに、全然眠らせないと、たちまち死んでしまうことでもわかるうというものだ。

体のためばかりではなく、精神にとつても睡眠と休息はきわめて重要な意味をもっている。考えなどもどんどん進めるだけが能ではない。本当にすぐれた思想になるのは、しばしば何年も「寝させておいた」考えである。立ちどまった考えが大きく育つ。

学校の先生はいい。長い休みがあるとと言われる。遊んでいて月給をもらってけしからんと考える向きもあるらしい。そういう俗物の思惑おもてなど気にしないで、休みは長い昼寝の時間と思つて、ゆっくり立ちどまることだ。

それでダメな人間なら、走り続けていればもつとダメになる。気兼ねなく休もう。
(お茶の水女子大学)